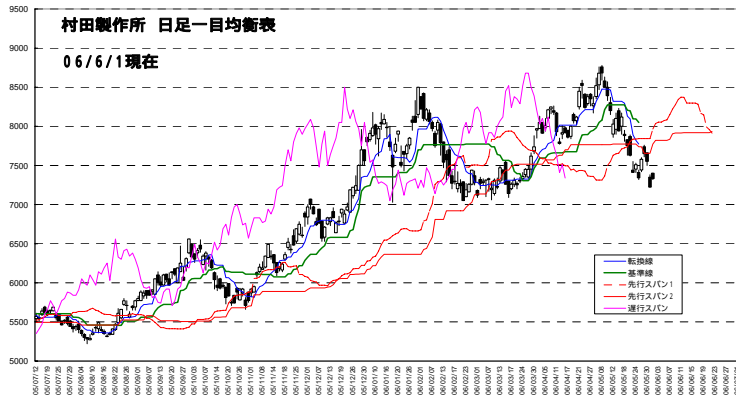


参考銘柄2

村田製作所 (6981 大証一部)



【セラミックコンデンサーの世界トップ企業】

6/1 株価 7260 円(100 株)

PER(実) 27.98 倍

PBR(実) 2.16 倍

ROE(実) 7.96%

発行済株式数 225,263,592 株

配当利回り(実) 1.08%

年初来高低 7030 8780 円

売買高 10 日移動平均 51300 株

ポイント1 電子部品の世界的メーカー

世界有数の電子部品メーカーである村田製作所。ロームや日本電産と並ぶ「京都銘柄」としても知られる。消費者の目に触れない電気機器内部の部品に製品群を特化しており、携帯電話やパソコンの中核部品でもある積層セラミックコンデンサでは世界シェアの3分の1を握る。売上高の4割近くは新たに開発した新製品群で占められる。韓国・サムスングループの会長をして「村田製作所がなくなったら世界の携帯電話はその日から半減する」とまで言わしめたガリバー企業である。国内で作り世界中で販売する、電子部品立国・日本を形作った立役者でもある。2006年3月期の決算は、売上高が4907億円(+16%)、税引前利益は916億円(+26%)、純利益は584億円(+25%)となった。2005年夏以降は携帯電話とデジタル家電製品の需要回復でフル生産が続いている。欧州中心に急速に普及している短距離無線通信規格「ブルートゥース」向け部品の拡大も寄与している。部品需要が逼迫しているため、部品メーカーにつきものの価格下落圧力も現在は緩和していることが大きい。今2007年3月期も売上高で+10%増、純利益で+13%増を見込んでいる。直近では、市場全体の下落調整局面に伴い、同社株価も下げていたが、連続の2ヶタ成長期待を背景にファンダメンタルズからは売られ過ぎとの印象が強くなってきているようだ。

ポイント2 静電実装技術で世界のトップを行く

高性能の部品をいかに小型化できるか。日本の電子部品メーカーが世界を制覇した課題はこの一点に集約される。村田製作所が世界に誇る「チップ積層セラミックコンデンサ」は、携帯電話やパソコン、薄型テレビには不可欠な部品で、いわば電子回路の中のダム役割を果たし、最も数多く使われている部品である。電子機器内のCPU(中央演算装置)にバッテリーを供給するのはすべてこの部品を経由して行われる。そのサイズは現在では「0402サイズ」(0.4ミリ×0.2ミリ)にまで小型化が進んでおり、もはや肉眼では判別することはできない。1970年ごろのサイズは3.2ミリ×1.6ミリだった。83年に1.6×0.8、90年に1.0×0.5、97年に0.6×0.3へと急速に小型化してきた。たとえば開発された当初の自動車電話は、トランクルーム一杯の装置を必要としていた。それが今では同じ能力を持ちながら、実装面積は90年当時に比べてほぼ1/6になっている。セラミックのシートを何枚も積み重ねる積層技術が村田のコア技術だが、そればかりでなくセラミックシートへの複雑な電極印刷技術、焼結による収縮を防ぐ無収縮焼成技術、低温焼結技術、チップ面実装技術、高周波立体回路技術など、さまざまなプロセス技術や製造装置をすべて内製化しており、それが同社の高い付加価値の源泉となっている。

この資料はファーストメイク・リミテッドが会員のみ発行するものです。当資料に記載されている数字・意見等は、当社がその正確性を保証するものではありません。また、投資に関する最終判断はご自身で行われますよう、お願い申し上げます。加えて、当資料の著作権はファーストメイク・リミテッドに帰属し、いかなる方法によっても、全部もしくは一部を無断で複製・転用・配布・転送することを禁じます。

村田製作所 (6981 大証一部)

ポイント3 今年度は大規模な設備投資を敢行

積層セラミックコンデンサの主原料はチタン酸バリウムで、水を加えてシート状に成形し、電極となるニッケルを吹き付けてから炉に入れ高温で焼き固める。異物が混入すると不良品になるため半導体工場並みのクリーンルームで製造される。現在、携帯電話には平均で230個、ノートパソコンには780個、薄型テレビには1000個程度は搭載されている。機器の高機能化に伴って1台当たりのコンデンサ使用量は急増しており、2010年の需要は2005年の2倍に膨らむと予測されている。村田が全額出資する子会社「出雲村田製作所」は単一工場としては世界一の電子部品工場として知られる。22万平方mの敷地の中に管理施設を含め11棟の建屋が並び、ここで積層セラミックコンデンサを一貫生産する。同市場で村田は世界シェアの35%を取っているが(続いてTDKと太陽誘電)出雲村田は全社の半分の生産を担う。前期の決算発表の席上で、同社は今年度、フル生産の続いている出雲村田に110億円を投じて20%の能力増を行う計画。全社での設備投資額も今年度は800億円に前期比1.6倍に積み増す予定で、積極的な事業展開を行っている。

ポイント4 デジタルチューナーは国内唯一の供給拠点

需給変動に対して慎重な電子部品業界にあって、村田がそこまで積極投資策を講じる背景には地上デジタル放送の普及がある。同社は日本で唯一、地上デジタル放送のチューナーを製造しており、その需要増が今後は期待できる。携帯電話による「ワンセグ」もこの4月からスタートしたが、携帯電話向けチューナーも同社だけが手がけている。ワンセグは携帯端末にチューナーが搭載されてはじめて普及が加速する。「将来は1兆円市場」と予想されており、積層セラミックコンデンサに加えてデジタルチューナーやその周辺部品でも村田の役割が増してこよう。

株価の動きは、1月18日に年初来安値7030円(大証。東証では6900円)をつけた後、株価回復し、5月8日の8780円まで、ほぼ一貫した上昇サイクルを経過してきた。ここもとは市場全体の調整局面が深化するにつれ、同銘柄も13週、26週移動平均線を次々と割り込んだ。深押しがあったとして、52週線(6797円)だが、市場全体が目先いったんリバウンドをすれば、そこまでの下落は免れよう。現在株価7300円前後だが、当面の戻りとして13週線(7850円)までで、その後も時間的調整を強いられる可能性はある。ただ、年後半以降の一段業績拡大に向けて基本的には長期投資向けの銘柄である。

業績(百万円・前期比%)

	売上高		経常利益		純利益		EPS(円)
2005/3(実)	424468	2.5	72905	-7.4	46578	-4.1	205.0
2006/3(予)	490700	15.6	91600	25.6	58400	25.4	262.49
2007/3(予)	540000	10.0	105000	14.6	66000	13.0	297.42

(四季報より)

この資料はファーストメイク・リミテッドが会員のみ発行するものです。当資料に記載されている数字・意見等は、当社がその正確性を保証するものではありません。また、投資に関する最終判断はご自身で行われますよう、お願い申し上げます。加えて、当資料の著作権はファーストメイク・リミテッドに帰属し、いかなる方法によっても、全部もしくは一部を無断で複製・転用・配布・転送することを禁じます。